

令和7年度 学校関係者評価書

学校園名 東京学芸大学附属高等学校

学校関係者による評価

領域	学校関係者による評価と今後の課題
<p>学校経営</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・組織運営の改善と満足度については、教師の労働時間短縮に向けた会議の簡略化や、志願者数の増加という目に見える成果が評価できる。 ・学校行事の充実度に対して生徒・保護者の95%以上が肯定的に回答しており、学校本来の教育方針に沿った円滑な運営がなされている。 ・目標及び想定した取り組みをしっかりと実施した。校内業務及び保護者との通知や情報共有には、適切にオンラインシステムを使うなど、業務改善も進めた。 ・情報発信と施設管理には課題が残る。ホームページにおける生徒の活動報告の頻度向上や、保護者から学校への連絡チャンネルのさらなる整備を求める保護者の声もある。 ・部活動のさらなる充実を求める保護者の声や、施設の老朽化・体育施設へのエアコン設置の遅れに対する不安も指摘されており、改善に向けた検討が必要である。 ・財政面での保護者負担についての改善は今後の課題である。
<p>教育活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先進的な学びの実践として、一人一台パソコンや生成AIのメリット・デメリットを見極めた活用や、生徒自らが課題を見つけ出す「本物教育」の推進が高く評価できる。 ・特に探究活動では、JSECでの受賞やISEFアメリカ大会への参加など、極めて高い成果を上げている。一方で、探究活動における生徒間の意欲格差の問題があり、探究活動が順調にいかない生徒への指導の充実も求められる。 ・進路指導と学力向上の面では、当初の進学指導計画が十分に実行されていないとの指摘や、難関大学進学に向けた小テスト・補講の充実、理系数学の進度を速めてほしいと言った声がある。 ・いじめを見逃さないための寄り添った指導体制の強化も課題として挙げられている。
<p>研究活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究拠点としての役割は非常に高く、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）3期目の活動を通じた理数融合授業の実践や、他校からの視察受け入れなど、全国的な水準を維持しており、評価できる。 ・生徒エージェンシーを育むカリキュラムを進める中で、教育現場への発信にも留意し、大学とともに我が国の教育の質の向上に努めてほしい。 ・タイのPCSHSCRとの共同研究や「国立附属SSH生徒交流会」の立ち上げなど、グローバルな連携も本校の大きな財産となっている。交流先をタイ以外（英米圏など）にも拡大し、多様な選択肢を提供することで、さらなる魅力向上を図ることが期待される。
<p>学生の教育・支援活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の充実が本校の大きな特色であり、年間約200名の教育実習生を受け入れ、実習生アンケートでも高い評価を得ている。 ・多くの教員が大学で講義を行うなど、大学との緊密な連携も評価できる。 ・今後も教育実習生に過重な負担をかけずに、より多くの優秀な教育者を輩出できる持続可能な体制の維持が求められる。
<p>社会貢献活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多角的な社会連携が地道に継続されており、地域の防災訓練や清掃活動、東日本大震災の被災地交流、視覚特別支援学校との交流の実施など、高く評価できる。 ・世田谷ワークショップへの生徒の貢献は、生徒自身の体験としても貴重である。生徒エージェンシーをここでも発揮していることに好感を持った。 ・これらの活動は、生徒が多様な社会的立場の方々と交流し、人間性を高める貴重な機会となっている。ただし、これらの社会貢献活動の内容が保護者に十分に伝わっていないという現状があり、学校からの積極的な情報発信を通じて、活動の意義を共有していくことが今後の課題である。